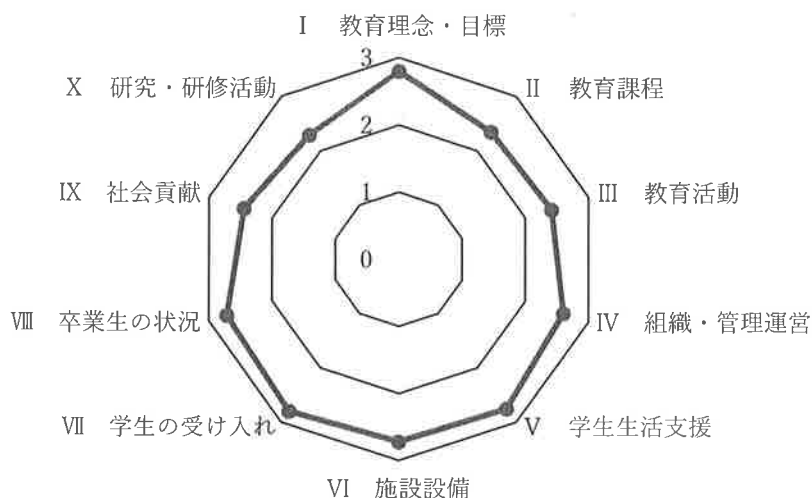


平成 31 年度 秋田しらかみ看護学院 学校自己点検・自己評価

目的

高度な保健・医療・福祉に対応できる確かな知識と実践力、倫理観を備えた看護師の養成のために、自己点検・自己評価を行い、学院の発展につなげる。

2018年度自己点検・評価（カテゴリー別）



評価基準 3：当てはまる 2：やや当てはまる 1：当てはまらない

		評価項目	評価	平均
I 教育理念・教育目的	教育理念・目標の意義と周知	1 教育理念・目的・目標は整合性・信頼性・妥当性がある	2.3	2.8
		2 教育理念・目的を明文化している	2.9	
		3 教育理念・目的は教育上の特色を明示している	2.6	
		4 看護専門職を明示している	2.75	
		5 教育観と学生観の明示している	2.6	
		6 教育理念・目的は人材育成内容と一致している	2.25	
		7 教育理念・目的・目標を学生にとって学習の指針になるように具体的に示している	2.5	
		8 養成する看護師が卒業時点において持つべき資質を明示している	2.75	
	教育目標の評価	9 教職員は教育理念・目的・目標について認識し、共有している	2.4	
		10 教職員は教育理念・目的・目標の達成に向けて努力している	2.5	
		11 教育理念・目標は学生に浸透している	2.25	
		12 卒業時点に於いて期待する姿になっているか評価している	2.1	
		13 教育理念・目標・目標と教育課程の考え方が一貫している	2.0	

		14 教育理念・目的・目標は社会変化、ニーズに対応し見直している	2.0	
評価の概要と今後の課題	<p>(小 14 項目) 学校の教育理念・目的・目標は、学生便覧や学習要綱、学校案内に記載している。入学時だけでなく、全体集会や実習前など目的に応じ、「畏敬の念」を軸に意義を周知するよう努めており、学生アンケート結果からも浸透していることが伺える。業務を遂行する 19 名の教職員が年度初めに「教育体制」「教育環境」等の目標を共通認識し、学生生活や学校行事（ボランティアを含む）、各講義内容を通し地域性やニーズに対応できる人材育成を主眼に置き、指導を行っている。しかし、専門職業人としての能力と人材育成・学生像からの懸隔（隔たり）が明らかな学生が年々留まる（留年）傾向が強くなっている。そのことを念頭におき、さらに教育理念・目的・目標を学生や保護者、地域に対しアピールを継続していく。時代のニーズを考え、見直しの時期にきていることから、教育理念・目的・目標に対する整合性・信頼性・妥当性を建学の精神と教育理念を整理し、当校が地域で担う役割と新カリキュラム改正を含め、検討していく。卒業時点での期待する学生像については、各実習評価やケーススタディ発表の評価、看護観レポート、アンケート結果をもとに考えることができるが、十分ではなく、評価可能な視点を明確化する必要がある。今後、社会的ニーズと学生の状況などを見据えて、理解を促す方法や評価方法の検討とともに教職員が理解し学生に浸透させていく。</p>			
II 教育課程	教育課程・シラバスの妥当性	1 教育課程は学修の到達点及び学生の成長発達について明確な考え方と根拠をもって編成している	2.3	2.35
		2 教育理念・目的・目標にあった科目設定をしている（整合性）	2.4	
		3 教育課程・授業・評価に至り一貫性がある	2.25	
		4 科目設定には学校の特色を盛り込んでいる	2.4	
		5 科目設定には学習者・社会のニーズを考慮している	2.25	
		6 科目の一般目標・行動目標は明確に設定している	2.7	
		7 指定規則に合致した科目と単位・時間を設定している	2.9	
		8 教育理念・目標にあった順序性で科目を配列している	2.4	
		9 科目の位置づけと科目間の関連性を明示している	2.4	
	編成見直し	10 教育課程の評価・見直しは定期的に行っている	2.1	
		11 教育課程の見直しは学生・講師・教員の意見を反映している	2.1	
		12 教育課程を評価する体系が整っている	2.1	
		13 教育課程評価の結果の活用において倫理的配慮を行っている	2.3	
評価の概要と今後の課題	<p>(小 13 項目)</p> <p>単位修得に関してはカリキュラムデザイン・細則等で明示している。便覧や要綱等で教育課程を明文化されており、科目の学習目標が明確化している。しかし、前回のカリキュラム改正時の検討でも教育理念・目的から科目まで一貫性をもった内容にすることの困難さがあったが、教育理念・目的・目標の見直しが必要であり、明確にする必要がある。現在、科目構成は教育課程の概要で各分野の考え方を明確にし、必要な科目を構成しているが、科目の配列については学生が系統立てて学習ができるように検討を重ねる。カリキュラム改正も考慮して教育課程は、国家試験の出題基準などを踏まえ編成する必要がある。また、科目構成、科目の単位・時間の設定を検討していく必要がある。倫理規定について便覧などの記載も含め検討していく。</p>			

Ⅲ 教育活動・教育指導のあり方	学習支援ガイドダンス	1 年度初めにカリキュラムガイダンスを行っている	2.7	2.41
		2 学生便覧は内容・構成が工夫して作成され学生が活用している	2.7	
		3 シラバスが作成され、活用について学生に説明している	2.7	
		4 単位履修の方法とその制約について教師・学生の双方が分かるように明示している	2.8	
		5 単位履修の方法は学生の単位履修を支援するものになっている	2.8	
	授業の計画調整	6 授業計画に基づいて授業は実施している	2.9	
		7 時間割の進度は、適切に調整している	2.8	
		8 授業形態は授業内容に応じて選択している	2.8	
		9 授業内容は、学生のレディネスを考慮し工夫・改善している	2.8	
		10 科目毎の授業内容を整理し、担当者へ周知している	2.6	
		11 学生数は120人定員の管理ができています	2.8	
	授業科目の担当・時間	12 科目を担当する講師は、その分野を教授するのにふさわしい人が担当している	2.8	
		13 教員が専門性を発揮できるよう教員の担当科目と時間数を配分している	2.6	
		14 教員一人当たりの週授業時間数は15時間以内である	2.9	
		15 教員の実習担当時間数は準備時間が見込まれている(事前指導・調整等)	1.7	
		16 教員が自ら成長できるよう自己研鑽のシステムを整えている	1.9	
	教育方法の工夫・環境	17 学生が自主的に考え学習することが可能な授業形態が導入されている	2.3	
		18 視聴覚教育機器・教材の質と量は十分で効果的に活用されている	2.6	
		19 効果的な教育方法について検討の場をもっている	1.8	
		20 備品は台帳記載され、定期的な点検や購入計画がされている	2.8	
		21 教育について日常的に教材研究を行っている	1.8	
	臨地実習施設	22 実習科目の目標・内容に見合った実習施設を確保している	2.6	
		23 実習施設は養成所の教育理念、教育目的、教育目標を理解している	2.0	
		24 実習施設は学生の看護実践を支援する体制を整えている	2.2	
		25 実習施設は実習目的を果たすために適切・妥当であるか定期的に見直している	2.2	
		26 実習指導者は実習要綱をもとに実習指導案を立案・実施・評価している	1.8	
		27 実習指導者と教員は役割分担を明確にして指導している	2.1	
		28 教員は授業終了時に評価表による学生からの評価を実施している	2.1	
	授業評価	29 教員間での授業評価が行われている	1.8	
		30 教員自身による自己評価をしている	1.9	
		31 評価結果に基づいて実際に授業を改善している	2.0	

	32 評価結果活用システムが明確である	1.4
単位認定・成績評価	33 進学への単位互換が可能な科目設定・時間設定である	2.6
	34 大学（短大）卒の入学生に単位の認定制をとっている	2.8
	35 評価の方法は試験・出席・学習状況・レポートにより行われている	2.8
	36 単位認定のための評価基準と方法を講評している	2.8
	37 進級・進度の基準を示し、適用している	2.8
	38 履修認定会議・進級判定会議は定期的を開催している	2.9
評価の概要と今後の課題	<p>(小 38 項目)</p> <p>カリキュラムの内容・配列を検討しシラバスを作成して単位履修の方法とその制約を学生に提示している。教育課程との整合性、看護学としての妥当性はマトリックスで確認できている。国家試験の合格率は2年続けて100%であったが、模擬試験の解説の暗記、教科書の丸暗記など思考力が育っていない学生や学生間での学習の共有が困難な学生もおり、<u>項目 17、19</u>を強化する必要がある。学生の技術到達度、教育計画では技術修得に時間を要する学生が増加してきていること、教育計画が過密で学生に時間の余裕がないことが大きな課題と考える。授業の展開過程に於いて科目終了時の授業評価が全教員で行われていないが、授業形態・指導技術は妥当性を評価するために授業評価が必要であり、実施に向け早急に検討していく。</p> <p>教員の協力体制は、教員会議を通じ人選・依頼をして柔軟に対応できている。<u>項目 15、16、18</u>の結果から、規定を充たした教員数であるが時間的余裕の無さが課題である。教員の学習環境・キャリア向上を含め、限られた教員数で時間調整をしていくことが大事である。</p> <p>単位認定については学生便覧に明記し、学生にも周知していて、評価基準にそって行っている。</p> <p>実習開始前には、実習指導者会議を行い、前年度の振り返りや実習要綱を基に実習の説明を行い、実習方法についての共有を図っている。しかし、(項目 26 の結果から) 同じような問題提示がされていることから、解決のための会議の在り方を考える必要がある。教員が援助に入ることも多く、教員・指導者の役割分担を明確化し協力を申し入れていくなど今後の課題である。</p> <p><u>項目 29.30,32 から</u>、学内で臨地実習についての全体ガイダンスで、臨地実習の評価基準を明示しているが、公平な評価ができるようにルーブリック評価の導入も検討していく。また、教員間での授業評価や自己評価、その活用システムに関しては今後の課題である。</p> <p>インシデント・アクシデントレポートはその都度、学生から提出させ、主たる実習病院においては、アクシデントの情報交換を行い、学校での対応も随時報告され分析し、安全対策に活かしている。</p> <p>シラバスについては入学時から活用方法を示して指導している。活用状況の把握・シラバスの説明強化をして、効果的な活用ができるようにすることが課題である。</p>	

IV 組織・管理運営	学校組織と関連組織の整備	1 教員・事務組織は責任者が配置され運営しやすい組織図ができている	2.8	2.6
		2 教員組織は運営に必要な人数と職種が配置されている	2.5	
		3 教員は看護教員養成課程を修了している	2.9	
		4 教職員の選考、資格審査・任命・昇格等について明確になっている	2.0	
		5 事務組織は運営に必要な人数と職種が配置されている	2.8	
		6 各職員が命令系統に沿ってその役割を果たしている	2.5	
		7 職員の人事について学校長・教務主任は意見を具申している	2.4	
		8 管理者は教員に将来像を構想として示している	2.5	
		9 講師や実習指導者は明示した資格要件をもとに選考している	2.8	
	人事配置	10 教員は看護学の専門領域毎に配置できている	2.8	
		11 実習調整者は専任で配置できている	2.3	
		12 教務助手は十分な臨床経験を有している	2.9	
	職務分掌	13 職務分掌を作成している	2.6	
		14 職務分掌に沿って学校職員は各役割を果たしている	2.5	
		15 業務内容は効果的な職務遂行ができよう適宜見直ししている	2.4	
	会議の参加運営	16 構成員として運営会議に出席し必要時に意見を述べている	2.5	
		17 構成員として管理会議に出席し、必要時に意見を述べている	2.5	
		18 学校運営会議は定期的開催し機能している	2.9	
		19 教員会議は月2回以上定期的開催している	3	
	学籍	20 学籍簿は学籍の記録、履修状況が正確に記載され、保管されている。	2.9	
		21 学籍簿は適切に保管され秘密が守られている	3	
	事業計画・予算	22 学校の事業計画を立てている	2.7	
		23 中・長期目標の予算計画が立てられている	2.6	
		24 年間予算計画・執行状況を把握し必要時に修正している	2.7	
		25 職員は歳入歳出の状況を把握している	1.9	
	経営意識	26 職員全員が経営意識をもっている	2.3	
		27 在学生は定員の90%以上を充たしている	3	
		28 職員は歳出削減に向けて努力している	2.6	
評価の概要と今後の課題	<p>目的、事業計画に沿った運営方針の策定、運営組織や意思決定機能が規則等において明確か、コンプライアンス体制などが適正におこなわれているかなどの評価（小項目28項目）</p> <p>教員の立場で経営意識をもって実践するのは難しいといえる。しかし、教職員が、それぞれの立場で十分に職責を果たし、教育活動の円滑な実施のための教職員の研修の保障、施設設備の整備、教材備品の整備等を担う事務の領域を含め、組織・管理運営に関心を持てるように情報共有を意識する必要がある。また、学納金と補助金（国庫補助金・秋田県単独補助金）で予算計画が立てられているため、今ある施設設備や教材をどのように活用し、利便性をあげていくかが当面の課題となってくる。</p> <p>災害時の対応を考慮し、学籍簿の保管方法についての検討が必要である。</p>			

V 学生生活への支援	健康管理	1 定期的に健康診断を実施している	3	2.75
		2 学生が日常生活の健康管理できるように指導している	2.9	
		3 臨地実習での感染防止対策をとっている	3	
		4 健康記録は的確に記載し活用している	2.9	
	学生相談	5 学生相談の窓口を設置していることを学生は周知している	2.8	
		6 学生相談の内容によって窓口（担当）を決めている	2.5	
		7 プライバシー保護のシステムができています	2.5	
		8 学生相談の専任のカウンセラーを置いている	2.6	
	課外活動	9 課外活動に対する教職員の支援・指導を受けることができる体制である	2.5	
		10 ボランティア活動の支援体制がある。(情報提供他)	2.7	
		11 学生自治会室がある	3	
		12 学生の自治活動が円滑にいくために助言・指導している	2.9	
	福利厚生	13 奨学金制度について学生に周知している	2.9	
		14 学生が学業を継続できる支援体制を多角的に整えている ・奨学金・カウセリング・既履修科目の認定、傷害保険、卒業・進路等に関する相談や支援など	2.8	
		15 学則の中で奨学金制度を学生に説明している	2.8	
		16 学生宿舎を有し管理責任者を置いている	2.8	
		17 学生宿舎の運営は学生が自主的に行っている	2.2	
評価の概要と今後の課題	<p>(小項目 17 項目)</p> <p>全体的に学生生活や学生の成長にかかわる点に関し積極的に取り組んでいる。</p> <p>学生相談室や担任との個別面談・指導・国家試験対策、進路相談を行い、多角的に支援している。また、入学予定者について、入試合格後、入学するまでに期間があるため、看護を学ぶ前に必要な基礎知識の学力アップを目的として、本を1冊購入し学習に取り組ませ、学力の確認をしている。また、学生の成績状況は年1回保護者宛に送付し、適宜に面談を行っている。</p> <p>保健室利用件数は31件であり、備品補充を含め、定期的に環境整備をしている。健康管理では、要精査(13名)・要観察者(23名)、に対し受診を勧め、結果報告を担当と情報共有し対応している。予防接種に関して各学年に計画的に進めている。学生相談窓口の設置とプライバシー保護の体制を整えて、カウセリングは1回/月で行っているが5件/年であった。</p> <p>賠償保険の利用も今年度21件の利用状況があった。担当教員が適宜学生の相談に応じながら支援できている。</p> <p>また、ボランティア活動の情報提供・支援を行っていることで、1年次から地域創生への参加が意識できている。</p>			

VI 施設設備	校舎の整備と管理	1 学生数に応じた施設基準を満たす設備がある	2.7	2.72
		2 グループ討議等ができる演習室を有している	2.5	
		3 教室は視聴覚教材が使えるように整備されている	3	
		4 校内施設利用規定を作成している	2.8	
		5 校内の施設利用は学生の効果的な学習ができるように配慮している	2.8	
		6 学生ホール（コミュニティ）は整備され憩いの場作りができています	2.5	
		7 災害時を想定した設備点検・マニュアル作成がされている	2.5	
		8 避難所としての設備を有している	2.5	
	図書 の 整備 と 管理	9 図書および資料は分野毎、領域毎に分類され整理されている	3	
		10 蔵書数は学生数に見合った十分な冊数である	2.8	
		11 専門分野は専門領域毎に計画的に増補している	2.8	
		12 学術雑誌は指定基準以上の種類を有している	2.9	
		13 視聴覚機器が整備されている	2.8	
		14 図書と学術雑誌およびDVD等の整備点検はできている	2.9	
		15 司書を配置している	2.9	
		16 学生が利用しやすい時間帯に開館している	2.8	
		17 新刊図書の紹介をしている	2.6	
		18 新刊図書増備の予算計画ができています	2.9	
		19 文献検索のためのインターネットの設備がある	2.8	
	教材 の 整備 管理	20 教材教具は定期的に点検を行っている	2.6	
		21 専門領域毎に教育内容にあった教材を計画的に増備している	2.4	
		22 器械器具、標本、模型は学生数に見合った十分な数を整備している	2.4	
		23 DVD等の視聴覚教材は自己学習に使用できる	2.7	
		24 教材購入の経費は年次毎に計画し増備している	2.9	
評価の概要と今後の課題	<p>(小項目 24 項目)</p> <p>図書・視聴覚教材に関しては、司書と教員との意見交換を年 1 回行い、必要な教材を検討し購入している。図書の分類・生理は司書が行っており、学生や教員のニーズを反映し、利用時間や期間を調整し対応している。各学年の実習やケーススタディのための貸し出し期間や紛失に留意して蔵書管理しているが、今後も貸し出し時の留意事項を徹底していきたい。</p> <p>施設修繕を行い、授業形態に応じて演習室を活用しているがグループワークを行う十分なスペースがない。各教室にプロジェクターが設置され、授業で活用されている。</p>			

VII 学生の受け入れ	学生募集	1 学校の教育理念・目標を反映した学生募集方針を定めている	2.5	2.8
		2 入学定員を明示している	2.8	
		3 推薦・社会人・一般入試制度の有無を明記している	3	
		4 学生の状況を察知した多様な選抜方法を検討している	2.8	
	選抜充足の状況	5 合格基準は明確にしている	2.9	
		6 被災学生の受け入れがある	2.7	
		7 入学試験の応募状況は抜粋選抜するのに十分な応募である	2.8	
		8 入学試験委員会が定期的開催されている	3	
		9 志願者・合格者・入学者などの推移とその評価をしている	2.8	
評価の概要と今後の課題	<p>(小項目9項目)</p> <p>入学者選考方法については、入試委員会が中心となり、入試試験実施規程に基づいて公平、情報漏洩が起きないように組織的に行っている。推薦入学試験の応募者、一般入学試験の応募者とも減少傾向にある。受験生はほとんどが県内の高校生であるため、県内の高校での進学説明会など広報活動を強化していくとともに、看護職の魅力を小・中学生にも伝えて看護職を希望する高校生を増やしていくことが課題である。</p>			

VIII 卒業生の状況	卒業生の進路	1 卒業生の90%以上は看護職を選んでいる	3	2.72
		2 卒業時点での進路状況が分類整理されている	3	
		3 統計資料(県内外)が経年的に整理され、活用されている	2.7	
		4 卒業生の就職先との情報交換や調査の実施等ができる体制を整えている	2.5	
		5 卒業、就業にあたっての進路相談・指導体制が整っている	2.8	
		6 卒業状況を入学時状況と比較している(学生数の変動等)	2.6	
		7 卒業時の学生の看護実践能力を把握している	2.4	
		8 期待する卒業生像と、就職先での評価は妥当である	2.2	
		9 秋田県に卒業生が就職している	3	
		10 国家試験合格状況は、全国の平均合格率を上回っている	2.9	
		11 国家試験合格状況を分析し、教育活動に活かしている	2.9	
評価の概要	<p>(小項目11項目)</p> <p>国家試験の合格率は2年連続100%に達したが、今年度は97.2%であった。国家試験終了後、学生の解答状況から正解率の低い問題の傾向、学生の問題のとらえ方を分析して課題を明確化している。※国家試験に関連する専門科目の講師に対しては、国家試験の分析結果を報告し、講義</p>			

要 と 今 後 の 課 題	<p>に反映させるように依頼している。今後も、学生の状況に応じた指導をおこなう事で国家試験の合格率を維持していくことが課題である。</p> <p>卒業生の就業・進学状況については、データ蓄積している。17%が県外就職であり8割程度が県内である。就職率もほぼ100%であり理念・目標との整合性はとれている。進路指導担当が就職ガイダンス、病院・施設説明会の時期や対象学年など学生アンケートを参考に調整している。本年度は大学編入者1名、助産科進学1名であったが、大学編入の受験科目に「TOEIC L&R」の Official Score Certificate (公式認定書) の提出が必要になったことから、講義内に TOEIC 演習問題と取り入れていくようシラバス変更した。低学年の病院見学やインターンシップ紹介への関心も高く、今後も担任と連携し、進路希望の状況を把握し、必要時指導に活かしていく。</p> <p>卒業生の就業後の評価も教育評価の1つであり、「卒業時に期待される学生像」が臨床につながる人材となりえている評価していく必要がある。看護基礎教育で担うべきところと臨床での卒業後教育で担うべきところの明確化にとっても必要である。そのために、就職先である臨床との教育評価を含めた協議や対話の場が必要と考える。</p>
---------------------------------	--

IX 社 会 へ の 貢 献	啓 蒙	1 看護教育および看護の情報を公開し、広報活動を行っている	2.5	2.45
		2 学校行事は地域性を考慮して教育計画に位置づけている	2.4	
		3 地域への働きかけは社会のニーズに応じた内容である	2.4	
	ボ ラ ン テ ィ ア	4 近隣施設へのボランティア活動に積極的に参加している	2.8	
		5 社会人および近隣施設の生涯教育の場として学校を開放している	2.4	
		6 近隣関連施設との情報交換および連携システムができている	2.4	
		7 避難所としての役割を示している	2.4	
		8 国際的視野を広げるための授業科目が設定されている	2.5	
		9 国際的視野を広げるための学習ができる環境を整えている	2.3	
評 価 の 概 要 と 課 題	<p>(小項目9項目)</p> <p>看護師教育の活動では、実習指導者講習や出前授業などの講師など看護師教育へ貢献している。ホームページや学生祭、ボランティア活動において地域住民との交流があり、情報発信はできている。看護学校は、公益性をもつ教育機関であり、創立時に多大な力添えと地域立(保護者、学校、地域一体)を公言していることから、近隣地域に情報公開・広報活動を行っていく。</p> <p>災害看護科目で JICA や国際協力の授業を取り入れ、国際的視野や災害時看護を考える機会を設定している。</p>			

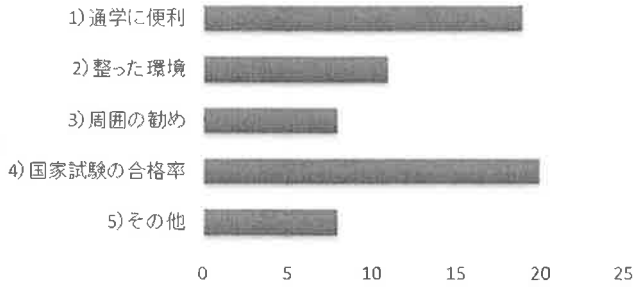
X 研究・研修活動	教員の研究研修	1 研究・研修への年間予算計画が設定されている	2.2	2.29
		2 教員の研究活動を保障している（時間的・財政的・環境的）	2.2	
		3 教員の研究活動を助言・検討する体制を整えている	2.2	
		4 教員は看護・教育関係の学会に所属している	2.4	
		5 教員は臨床ナースと連携や交流を図り、臨床看護研究に取り組んでいる	2.2	
		6 研究成果を公表している	2.6	
		7 教員は計画的・自主的に研修に参加している	2.3	
		8 教員が研修に参加できるシステムが作られている	2.3	
	点検・評価	9 自己点検・自己評価ができる基礎データ等を整備している	2.4	
		10 自己点検・自己評価の結果を公表している	2.2	
		11 評価を活かし改善している	2.3	
		12 自己点検・自己評価の活動は教職員に明確に理解されている	2.2	
評価の概要と課題	<p>教員の研修・研究活動は、教育力の向上・教育の質の担保のためにも個人的・組織的に重要である。現在、実習指導や学生指導等で教員の教育・研究活動の時間は十分にとれていない中、自主的に多くの教員が自己負担で研修に参加している。教員1人あたりの年間研修予算を明確に設置し提示されていけば、財政的負担の改善につながると思う。また、教員のキャリア形成が明確でなく、研究をするという研鑽ができていないことから、計画的に参加して質の向上に努める必要がある。教員各自が自由な教育背景をもち、研究テーマを持って1・2年で発表できるような取り組みが今後の課題である。</p>			

—評価の概要からの抜粋—

入学から卒業・就職までの流れの中でカリキュラムを含めて一貫した教育活動が行われているか、妥当な教育活動ができているかを中心に評価した。看護師養成所としての特徴・地域における存在意義を考慮しながら、学校長を初め、教職員が連携を取りながら、学生の学習目標達成に向けて努力されている。時代の変化に合わせ、教育理念・目的・目標に対する整合性・信頼性・妥当性を踏まえて見直す必要があり、運営の改善も含め、さらに質の高い看護基礎教育の実践に向けて尽力していきたい。

2018年度 新入学生アンケート結果（対象 44名 100%）

本学院を選んだ理由

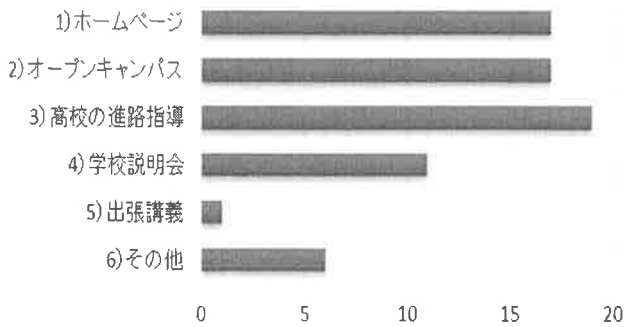


本学院を選択した理由として、「通学の利便性」や国家試験の合格率をあげる学生が多い。

その他

- 将来働きたい地元で実習可能と知ったから (1)
- ボランティア活動で経験を増やしたかったから (2)
- 希望したところ全て落ちたから (2)
- 建学の精神に共感したから (1)
- 社会人学生への理解があると思ったから (1)
- 地元で学び、就職したかったから (1)
- 寮があり自宅からも比較的近いから (1)

本学院を知った方法

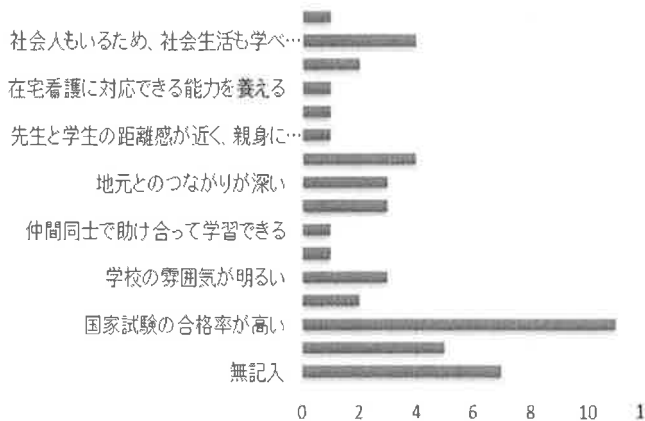


本学院を知る機会となった経緯にホームページやオープンキャンパスが挙げられているが、高校の進路指導や学校説明会との兼ね合いで知る機会となったと考えられる。

その他

- 知人から (2)
- 職場の先輩から (1)
- 親 (2)
- 病院で実習生と関わる機会があったため (1)

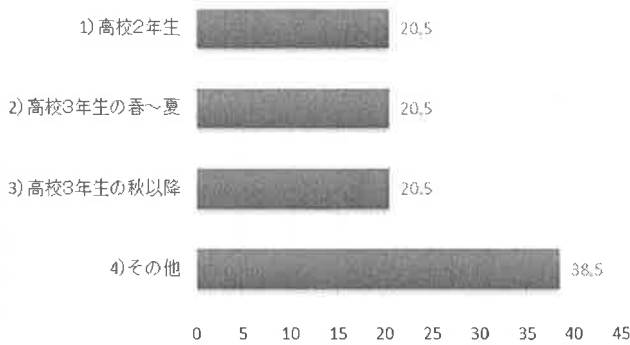
本学院のイメージ



「本学院に対するイメージ」と「学校を決定した理由」は、重複する内容がみられる。

国家試験の合格率の高さや、地元重視が伺えるが、教員との距離感や学校の雰囲気を好イメージで挙げられているのは、オープンキャンパスや学校紹介による力大きいと考える。

進学決定時期

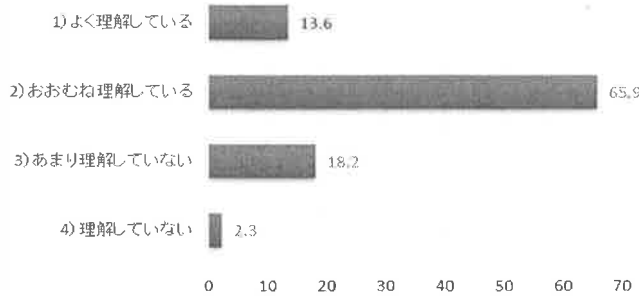


おおむね、高校2～3年次に看護学校への進学を決定している。秋以降で決定したものは複数受験した結果での選択決定したもの半数。また、社会人入学も多いことから、出産や就職経験の中で選択・決定した学生もいた。

その他

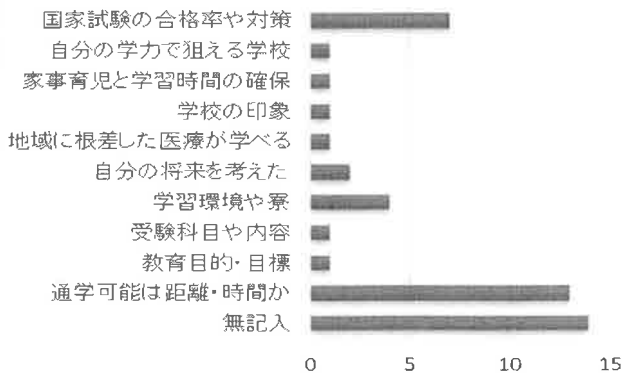
就職して数か月経過した頃 (2) 社会経験後 (1)
結婚出産してから (1) 中学1年から (1) 介護士の仕事を
した後 (1) 中学2年生 (1) 小学校5年生 (1) 高校
1年生の春 (1) 昨年の2月から春頃 (2)

教育理念・教育目標の理解



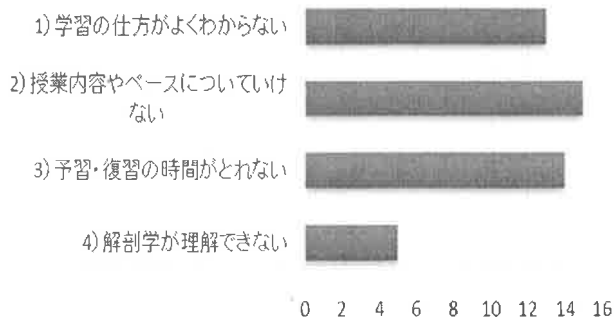
8割近くの学生がおおむね「教育理念や目標の理解」していると回答している。学校紹介や広報などや、入学時のオリエンテーションの効果であると考えられる。

学校決定で重要視したこと



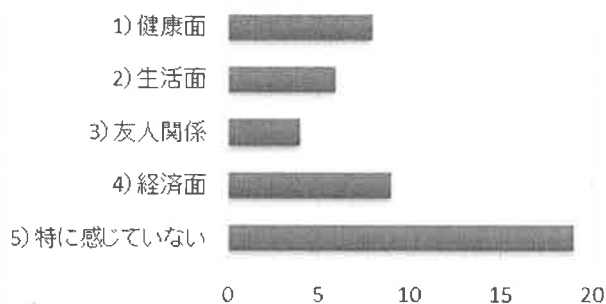
学校選択・決定で重視されている理由として国家試験の合格率と通学可能な地元志向が上位を占めている。国家試験合格のための取り組みとともにアドミッションポリシーの浸透も図っていく必要がある。

学習面での不安



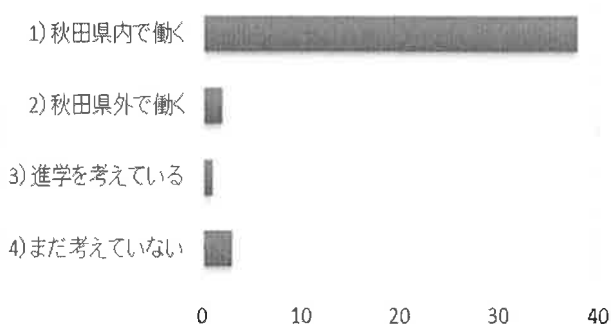
学習意欲はあるものの「自学習習慣の欠如」や目的意識の薄い学生が入学してきている傾向がある。また、90分講義と集中力が持続せず、要点がつかみにくいことや早い段階で「解剖学」が開講することが要因となって、学習面の不安を訴えていると考える。入学後の学生生活としての心構えができるよう支援方法を検討していきたい。

学習以外の不安



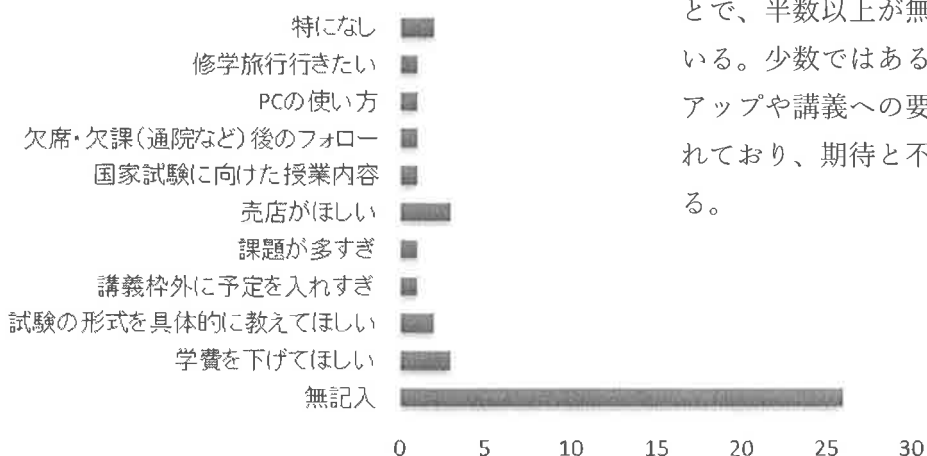
当学院は私学であることで学費も公立や医療法人系列校と比較して高く、社会人入学生の比率も高いことから、経済面に対する不安がみられるのは合点がいく。また、親元を離れ一人暮らしを始める学生もいることから生活や健康面への不安を抱いていることがわかる。学生への支援をもっと明確に開示し支援していきたい。

現時点での卒業後進路



入学時の卒業後の進路として圧倒的に県内就職希望者が占めている。本学院の地域創生の趣旨と合致するものである。

本学院への希望



入学して間もない時期でのアンケートであることで、半数以上が無記入・特にないと回答している。少数ではあるが欠課・欠席後のフォローアップや講義への要望が少数ではあるが記載されており、期待と不安が混在しているのがわかる。

2018年度卒業時アンケート結果

